

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720158

研究課題名(和文)文学批評再読による1960年代英国文化論 - 「モダニゼーション」による社会の消失

研究課題名(英文) Describing the 1960s British Culture through Re-reading Literary Criticism: "Modernisation" and Disappearance of Society

研究代表者

大貫 隆史 (ONUKI, Takashi)

関西学院大学・商学部・准教授

研究者番号：40404800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代の文学批評・政治的言説の読解により分かるのは、その支配的な文化のパターンが「社会からの逃亡」という形態をとることである。その一方で、この文化のパターンへの応答を、レイモンド・ウィリアムズのライティングに見出すことも可能であって、社会的なアクションには社会からの逃亡を含め、それに対するアクションが必ず生じるのだが、そうした組織化(organisation)のリソースは、例えば風景といった「物理的自然」に求められ、かつ、その組織化のイメージは場所に固有のものとなる。彼の言葉づかいに従えば、これは感情の構造であり、その限りにおいてイデオロギー的な(歪みをともなった)ものである。

研究成果の概要(英文)：Through examination of political discourse as well as literary criticism in the 1960s Britain we can find a dominant pattern of culture working in the form of "escape from society"; on the other hand, a certain response or reaction to this pattern can be certainly discovered in Raymond Williams's writing; there always occurs an action to any social action including the one of escaping from society, but the significant resources of such organisation lie indeed in the "physical presence" of nature-the landscape or scenery, for instance-which can be described in its particular wording of the place. To follow his wording, it should be a structure of feeling, and to a certain extent be ideological (distorted).

研究分野：英米・英語圏文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英文学 文学批評 文化論 イングランド ウェールズ 近代化論

1. 研究開始当初の背景

(1) 1960年代のイギリスは、旧来的な社会編成が、その変化を経験するというよりも、そうした編成それ自体が価値を失う時代として特権化されてきたと言えるだろう。こうした論調を主導してきた代表的論者である歴史家アーサー・マーウィック (Arthur Marwick) によると、1950年代までは、高級文化/大衆文化、主流文化/サブカルチャー、集団の規範/個人の自由、大人/若者といった、上下関係をともなう社会的区分が有効だったが、1960年代には、大衆文化、サブカルチャーといった、上記の二項対立の中で下位に置かれていたものが大きな存在感を持つようになり、この時期に、上下関係をともなう社会的区分それ自体が批判された、ということになる (*Windows on the Sixties: Exploring Key Texts of Media and Culture*. London: I. B. Tauris, 2000. xi-xx)。別な言い方をすると、Marwick 的な視点では、社会への反抗が、1960年代の特徴ということになる。

(2) ただし、研究代表者が1950年代英国文学批評を再読する作業のなかで浮かんできた疑問は、様々な社会的規範にまつわる意識や行動の変化は「長い」プロセスなのではないか、というものである。あわせて、マーウィックらの議論の背後には、ポストモダン論があるのだが、1960年代の文学批評の再読から見えてくるのは、「モダン」や「モダニゼーション」という言葉がキーワードとなっていた可能性である。

こうした可能性を踏まえて、研究代表者が提起したい問いとは、「社会の消失」という長いプロセス (モダニゼーションのプロセス) において、文学批評が見逃しがたい役割を担っていたのではないかと、いうものであり、あわせて、従来の英国文化論のなかでウェールズの経験が不在のものとなりやすかったのではないかと、いうものである。

2. 研究の目的

本研究課題は、1960年代英国文学批評を再読することで、社会の消失、モダン/モダニゼーション、ウェールズの経験の不在という新たな観点を提出し、60年代文化論見直しの先鞭を付けることを最終目標とするものである。

(1) 本研究課題が第一に考察しようとするのは、「社会の消失」という問題が、文学批評において、どのように記述されてきたか、という点である。同時に、そうした記述と、同時代の政治的言説の関係を浮き彫りにする。

(2) 第二に本研究課題が焦点を絞るのは、こうした社会消失論と、とりあえず呼称しうる

ものの外部である。社会的な紐帯を、1960年代に (複雑なやり方で) 肯定しつづけたイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) の著述を議論する。

3. 研究の方法

(1) 1960年代の文学批評と政治的言説の共通点と差異を分析するとき、第一の考察対象となるのは、ライオネル・トリリング (Lionel Trilling) である。トリリングがその育成を目指す「モダン」な人間にとって、社会的紐帯は、個人の精神的成長を阻害するものに他ならない (Trilling, *Beyond Culture: Essays on Literature and Learning*. New York: Harcourt Brace, 1965. 19-41)。そして興味深いことに、同時代の労働党首ハロルド・ウィルソン (Harold Wilson) が重視した“modernisation” (近代化/現代化) 論にとっても、社会的紐帯は、経済成長にとって有害な除去すべきものだった (R. Williams, “The British Election,” *Nation* 28 Sept. 1964: 154-7)。トリリングの「モダン」論と、ウィルソンの「モダニゼーション」の間には、コインの裏表的な関係が潜んでいる可能性がある。本研究課題ではこれらの観点を活用しつつ考察を展開する。

(2) 社会の消失という感情のあり方が力を持ちつつあるなか、1960年代末のウィリアムズは、文化とは、人びとの間の繋がり (社会的紐帯) を複雑に成長させ続けるプロセスだと考えた、と言って良いだろう (Williams, “Culture and Revolution: A Response” *From Culture to Revolution: The Slant Symposium*. 1967. Ed. Terry Eagleton and Brian Wicker. London: Sheed and Ward, 1968. 298-9)。素朴な経験論として批判され忘却されてきたこの議論は、社会消失という支配的な感情のあり方への応答としてみなすと、そのアクチュアリティが見えてくることになる。悲劇として社会消失と、それへの応答と見なしうる社会的紐帯としての文化という観点から、考察を進める。

(3) (2)の社会的紐帯としての文化というウィリアムズによる応答が、イングランドの経験を見るだけでは十分に理解できないことを明らかにする。ウィリアムズの出身地にほど近い南ウェールズ工業地帯は、戦後イングランド的な「豊かさ」経験と基本的には無縁であった (Dai Smith, *Wales: A Question for History*. Seren Books, 1999. 191-205)。こうした経験が、ウィリアムズの著述におよぼしたものを考察する。

4. 研究成果

(1) 研究目的(1)を遂行する上で、第一に焦点を合わせた文学批評家はライオネル・トリリン

グである。確かにトリリングはアメリカの批評家なのだが、第二次大戦後英国を代表する文学批評家の一人であるレイモンド・ウィリアムズがトリリングを仮想敵の一人としていたこと(“Beyond Liberalism.” Rev. of *Beyond Culture: Essays on Literature and Learning*, by Lionel Trilling. *Lionel Trilling and the Critics: Opposing Selves*. Ed. John Rodden. Lincoln: U of Nebraska P, 1999. 269-71.)を踏まえると、その環大西洋的影響力は無視できないものがある。

トリリングはその著書のなかで、文学批評(教育)の目的を、「文明(civilization)」のもたらす「地獄」のような状況を直視できるような人間を涵養することにあると述べ、そうした「近代的」人間にとっての代表的なモデルとして、コンラッド『闇の奥』の Kurz を挙げている。ここで重要なのは、そうした「リアリティ」の直視を阻むものとして「社会的紐帯(the social bonds)」が記述されている点である。「多様さ、可能性、複雑さ、困難」にみちたリアリティを直視しないと大衆的人間になってしまうのであり、近代的人間になるためには、集団的な繋がり、とくに「社会的紐帯」から逃れねばならない、とトリリングは主張する(Trilling, Lionel. *Beyond Culture: The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*. 1950. New York: New York Review Books, 2008.)

興味深いことにこうした「近代」観は、1960年代イギリスの労働党リーダー、ハロルド・ウィルソンのそれと、表裏一体のものとなってしまっている。レイモンド・ウィリアムズはウィルソンの掲げる「モダニゼーション(近代化)」政策について、それが、「マーケット」の拡大を阻害するものを「攻撃」し除去しようとするものであると指摘した(R. Williams, “The British Election.”)。ウィリアムズの言う、そうした(経済成長を阻害する)「制度や精神習慣」とは、一例を挙げれば、労働者コミュニティであり、さらには、そうしたコミュニティと有機的に結合した労働運動やストライキということになる。

こうした「制度や精神習慣」は、トリリングの言葉づかいのなかでは、「社会的紐帯」ということになってしまうだろう。トリリングにとって社会的紐帯は「精神の完全な成就」を阻む障害物であり、ウィルソンにとってはマーケットの拡大を阻む、同じく障害物である。この点において、二人は同一平面上にいる。

レイモンド・ウィリアムズは、こうした、文学的か政治的かを問わず、1960年代に支配的であった近代(化)のレトリックを仮想敵としたわけだが、彼はそれを単に非難するというよりは、ある連続性(コンティニュイティ)のなかに位置付けようとする。社会を忌避する思想としてのリベラリズムは、その後継的思想としての自然主義とロマン主義を産み出した。前者も後者も、社会を「機械」

とみなす点で同じ平面上にいる。自然主義者ウィルソンは、社会を「機械」として見なす中で、「社会的紐帯」を、機械にとっては有害な有機物とみなし、ロマン主義者トリリングは、同じく社会を「機械」として見なすなかで、「社会的紐帯」を、社会=機械というリアルな等式の所在を見誤らせる有害物とみなした。しかしそれと同時に、こうした社会=機械という不十分な等式へのリアクションも生じてきた、とウィリアムズは述べ、これに「長い革命」という名前を与える(*Modern Tragedy*. 1966. Ed. Pamela McCallum. Peterborough, ON: Broadview, 2006.)

(2)トリリングとウィルソンに対するウィリアムズの姿勢は、それを全否定するものではなく、むしろ慎重に「部分肯定」していくものであり、これはひとつには、あくまでウィリアムズが自らのライティングを、社会の内部から記述していることに由来している。

こうしたウィリアムズの姿勢は、彼自身の言葉づかいを借用すれば「二重視」という、観察者と関与者の双方の視点を同時に持つ態度とも言い換えることができる。

ウィリアムズも指摘するように、とりわけ1950年代の文学ではそうした二重視を否定するようなD・H・ロレンスに「部分的」には発する「逃亡の小説」(*Politics and Letters*, London: Verso, 1979)が支配的だった。つまり、労働者階級の生活から逃亡し、個人の内面的変化のみを求めるような小説がイギリスでは第二次大戦後ポピュラーになっていったということであり、(1)で述べたトリリングの「リベラル・モダン」的な批評、すなわち、個人の精神的「成就(perfection)」を求める批評もまた、社会からの「逃亡」という点において、「逃亡の小説」と同一平面上に位置付けられよう。

まとめると、こうした「社会からの逃亡」という姿勢こそが、1960年代イギリス文化において支配的なものとなる「文化の型」だったとすることができるのだが、こうした傾向は、小説や文学批評、あるいは政治言説のみに限られるものではない。

イギリスでは、1950年代後半のベルトルト・ブレヒト受容以降に加速するモダニズム的社会イメージもまた、上記の「社会からの逃亡」という文化の型におさまる部分が多い。その当初は演劇論として、次いで思想的議論として知識層に浸透したブレヒトの議論は、厄介なことに上述の二重視と重なり合う部分が多い。つまり、舞台上の出来事に没入する演者(関与者)と、それに距離をとって眺める観客(観察者)の二重の視点を持つことが大事だという主張が広く支持されたのである。

しかし、このモダニスト的二重視は、じつは、時間的に分離した二重視である。演者=関与者は社会内存在である一方、二重視を行

う批評家は、社会から分離した存在なのだ。演者＝関与者は、時間をかけて啓蒙されれば二重視を獲得できる一方で、批評家はそうした二重視を既に獲得している。この時間的なレトリックによって、批評家は社会から「逃亡」した存在であることが許されることになる。

このモダニスト的二重視と、ウィリアムズ的な二重視の違いは、後者の二重視が一回では終了しない連続した二重視である点に求められる。前者の二重視は（レトリックによって）時間的に分離しており、関与者の不十分な視点は、（事後的に観察を行う）観察者の視点によって正確に補足される。その一方で、ダイ・スミスが示唆するように、ウィリアムズにとって「見ること（seeing）」とは、現状への具体的な関与と切断し得ないものなのであって（Dai Smith, “Afterword: Found in Translation.” *Key Words: A Journal of Cultural Materialism* 9 (2011): 144-7）、ということは、ウィリアムズ的二重視は、あくまで観察者であると「同時に」関与者である二重視なのである。関与者でもある以上、その二重視は必然的に、つねに不十分なものになってしまうのだが、逆接的なことに、そこにこそ可能性が見出される。あるいは、後者のウィリアムズ的二重視を、本人の言葉づかいを借りて、「複雑視（complex seeing）」と言い換えても良いだろう。「複雑視」とは、観察者としての書き手をつねに関与者として位置付ける見方のことであり、関与者であるからには、その視点は、つねに不十分さにつきまといわれることになる（“A Defence of Realism.” 1976. *What I Came to Say*. London: Hutchinson Radius, 1989.）。大まかにいって、この複雑視という感情構造が、「社会からの逃亡」という文化の型への、ウィリアムズが見出したリアクションである、ということができよう。

(3) しかし問題なのは、ウィリアムズの言うような、疎外を克服する運動としての「長い革命」が、なぜ持続しうるのか、ということである。言い換えると問題は、ウィリアムズのいう「複雑視」の運動が、持続しうるのはいかなる理由なのか、という点にこそある。

ここでポイントになるのが、ウィリアムズとウェールズとの関わり、とりわけ、1970年代以降に執筆され死後刊行された小説 *People in the Black Mountains*（全二巻）を執筆するウィリアムズのウェールズ経験である。

(2)で述べたような、ある支配的な文化の型が、それに反発するような感情の構造によって修正を余儀なくされる、という変化のイメージは、1961年に刊行された *The Long Revolution* でのウィリアムズの記述に即せば、「組織化・組織的变化（organization）」ということになる。この「オーガナイゼーション」という言葉は、ウィリアムズにおいて

「有機体的なもの（organic）」なものと不可分のものであり、言い換えると、（人間的自然＝本質を含む最大限広義の）自然と人間との相互交渉のプロセスそのものを記述するためのものだと言えるだろう。

マルクス主義の伝統でも広く論じられるように、人間は自然環境に対した受け身の存在ではない。自然に積極的に働きかけ、それと同時に自然によって変容を被る存在が人間である。たとえば、野生動物であった羊を組織的に放牧し始めるとき、羊という自然の存在も変化し、それと同時に、人間の本質＝自然（human nature）もまた、例えば居住形態や社会組織といったあらわれをとりながら変化する。

換言すると、「オーガナイゼーション」とは、ある変化をその変化のみに分離することを許さないような変化のことである。

しかし、こうした「オーガナイゼーション」それ自体について、*The Long Revolution* のウィリアムズは理論化していない。というのもこれはむしろ誠実な記述のスタイルであって、文化人類学者のアダム・キューパー（Adam Kuper）が指摘するように、文化の理論が、文化の決定因を、文化に内在するものとして記述してこなかったためだ。キューパーが示唆するように、文化の決定因を文化内在的なものだけに限ってしまうと、その理論は貧弱なものになってしまう（*Culture: The Anthropologists' Account*, Cambridge: Harvard UP, 1999）。

したがって、ウィリアムズが文化の変化要因を「オーガナイゼーション」という有機体的なものに求めたことは、キューパーの指摘の限りでは正当性がある。ただし、ウィリアムズは文化の理論だけを記述した書き手ではなく、むしろ小説を主とするフィクションの執筆に最大のリソースを注いだ人物だった、という近年の研究による指摘がある（Dai Smith, *Raymond Williams, A Warrior's Tale*, Cardigan: Parthian, 2008）が、1970年代以降に執筆が開始され、その死後に刊行された *People in the Black Mountains* では、彼の故郷である、イングランドとの国境沿いに位置する地域（Black Mountains）における数万年前からの人びとの暮らしが連続的に記述されている。

この大部の小説で焦点が据えられているのが、「オーガナイゼーション」それ自体の変化である。生存のために「馬」を狩る旧石器時代の家族が、障害を負った子どもを生き延びるために置き去りにせざるを得なかった、という出来事に見られる「人間的自然＝本質」は、おそらくは長い世代を経て、「組織化」を被る（いつしかその場所は「墓地」となる）。こうした人間的自然＝本質を含む広義の自然が組織化という変化をどう被るのか、正確には、組織的变化（オーガナイゼーション）それ自体が、どう変化するのかを *People in the Black Mountains* は、数万年

という長いタイムスパンとともに、記述している。

なぜ(疎外を絶えず克服する運動である)「複雑視」が持続しうるのか、という問いに戻れば、人間的自然=本質が「オーガナイズーション」を伴うものであるからだ、ということになる。というよりも問題は、どのような「オーガナイズーション」すなわち組織的变化が生じるのかである。これについてウィリアムズが示唆するのは、組織的变化をイメージする上で、そのリソースとなるのは、「物理的存在 (physical presence)」としての自然だ、ということである (“The Tense of Imagination,” *Tenses of Imagination: Raymond Williams on Science Fiction, Utopia and Dystopia*, Ed. by Andrew Milner, Oxford: Peter Lang, 2010)。つまり、組織的变化のイメージは、地域によって固有なものとなるのであって、この観点を、1960年代に支配的となった文化の型への応答の開始点とみなすことができるのかもしれない。ただしこれは、ウィリアムズの言葉づかい(ワーディング)を再度借用すれば、感情の構造と呼称すべきものであり、普遍的な真理とは異なるのであって、ある種のイデオロギー的な(歪みをともなった)ものである。一見したところ否定的に見えることだが、この「歪み」こそが、新たな感情の構造を産み出す契機となり得るのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

大貫隆史、河野真太郎、「レイモンド・ウィリアムズ—ストライキ、共同体、そして文化」、『POSSE』、査読無、第20号、2013年、218-231

大貫隆史、「ふたつの二重視—ポピュラー・ポリティクスとプレヒト再発見」、『商学論究』、査読無、第60巻第1・2号、2012年、667-688

大貫隆史、「社会の消失とモダニゼーション—トリリング、ウィルソン、ウィリアムズ」、『レイモンド・ウィリアムズ研究』、査読無、第3号、2012年、97-114

〔学会発表〕(計2件)

大貫隆史、「文化という言葉、サブカルチャーという言葉—イギリスの批評と思想にその系譜を探る」、『言語コミュニケーション文化学会(招待講演)2013年6月8日、関西学院大学上ヶ原キャンパス

大貫隆史、「モダン・ドラマとクリティシズム」1947-54年の Raymond William」、日

本英文学会中国四国支部第64大会シンポジウム 戦後イギリス演劇 Nation / Globalisation、2011年10月30日、島根大学松江キャンパス

〔図書〕(計1件)

大貫隆史、河野真太郎、川端康雄(以上編著者)、三浦玲一、近藤康裕、遠藤不比人、越智博美、秦邦生、鈴木英明、山口菜穂子、杉本裕代、『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』(「国民」の項担当)、研究社、2013年、総頁数382(担当頁数118-126)

6. 研究組織

(1)研究代表者

大貫隆史 (ONUKI, Takashi)

関西学院大学・商学部・准教授

研究者番号：40404800